

令和 6 年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告



目 次

1.対馬市島おこし協働隊制度概要	P1
2.対馬市島おこし協働隊 隊員プロフィール	P2
3.令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)	P5～12
4.令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書	P13～48
釜坂 綾 隊員 (海の森再生支援担当)	P14
岸本 亜寿沙 隊員 (コミュニティ支援担当(南部担当))	P21
橘田 ゆかり 隊員 (北部対馬活性化プランナー)	P25
荒井 勇 人 隊員 (自然共生チャレンジャー)	P29
中屋 桜 隊員 (対州馬保存・活用支援担当)	P35
岡本 遥 香 隊員 (SDGs 研究員)	P39
川邊 裕太郎 隊員 (つしま人財コーディネーター)	P45

対馬市島おこし協働隊制度概要

地域づくり課 島おこし協働隊事務局

分 類	詳 細
事業目的	特定分野の専門知識・経験や社会貢献への熱意を有し、地域づくりや島暮らしに関心を持つ都市部の外部人材を受け入れ、外部目線を活用した地域づくりの支援を行う。
制度開始	平成 23 年度(総務省地域おこし協力隊制度を活用) 全国の導入団体数/隊員数:31 団体/89 名 (H21)⇒1,164 団体/7,200 名 (R5)
予 算	特別交付税による財政支援(人件費 370 万円/活動費 150 万円)、市一般財源
特 色	市各部局における重点施策の推進を図ること、専門性を有する優秀な人材を確保するため、活動分野を絞った公募を実施するとともに、各隊員は各事業担当部局へ配属している。
隊 員 数	現役隊員:7 名(令和 7 年 3 月 31 日現在) OB/OG :39 名(男性 20 名、女性 19 名)うち定住 16 名(男性 8 名、女性 8 名) ※定住者 16 名のうち起業定住 11 名(男性 5 名、女性 6 名)
推進体制	・全体マネジメント:島おこし協働隊事務局(しまづくり推進部地域づくり課) 例)外部への活動周知、隊員間の連携業務調整、取材対応等、採用事務 ・活動コーディネート:各担当課(※各隊員に担当者を配置) 例)活動内容の策定、業務管理等 ・報酬・共済関係 :総務部人事課
成 果	・地域・市民活動の活発化に寄与 ・隊員の活動をきっかけとする関係人口・移住定住者の存在 ＝「人が人を呼び込む好循環」 ・優秀な人材の定住 ・社会貢献型ビジネスの創出(任期終了後の起業者)

協働隊の日々の活動の
発信はこちら

島おこし協働隊
Instagram



島おこし協働隊
Facebook



対馬市島おこし協働隊 隊員プロフィール

◎釜坂 綾（かまさか りょう） 海の森再生支援担当



【所 属】：農林水産部水産課

【着 任 日】：令和3年4月1日

【ミッション】

海の森（藻場）を再生することで漁業者が安心し、安定的な生活を行うとともに、若者が島で漁業を営み暮らせる環境づくりを目指す。また「海の循環」を推進し資源回復に積極的に取り組み、その具現化を図る。

【プロフィール】

広島県尾道市から移住。長崎市出身。福山大学工学研究科生命工学専攻（博士前期課程修了）。大学生時代、対馬にインターンで来島した際に水産資源の豊かさやその固有性に強く惹かれるとともに、有害魚による磯焼け被害も目の当たりにし、その改善や地域への啓発事業等に積極的に携わりたいと考えて協働隊を志願した。

◎岸本 亜寿沙（きしもと あずさ） コミュニティ支援担当（南部担当）



【所 属】：しまづくり推進部地域づくり課

【着 任 日】：令和4年6月1日

【ミッション】

対馬南部において地域支援にかかるニーズ調査、それに基づく地域支援策の検討と実践を行い、コミュニティ社会の維持と強化を目指す。現在、空き家対策を切り口としたコミュニティ活性化に取り組んでいる。

【プロフィール】

福岡県福岡市から移住。移住前は不動産業界にて賃貸営業や情報通信業界にて企画推進の業務に従事。以前より離島への移住を希望しており、移住した際にはその島に貢献できるような仕事をしたいと考えていたため、島おこし協働隊を志望した。地域の問題である空き家対策から、移住定住促進、移住者と地域住民の交流を念頭に置き活動を行っている。

◎橋田 ゆかり（たちばんだ ゆかり） 北部対馬活性化プランナー



【所 属】：上対馬振興部地域振興課

【着 任 日】：令和4年8月1日

【ミッション】

北部対馬の観光について自然、歴史、文化、伝統等を活かした企画・立案をするとともに、地域・事業者と連携して問題解決に取り組み、地域の観光業・商工業の発展を目指す。

【プロフィール】

神奈川県鎌倉市出身。2児の母。総合商社（機械輸出）、クルーズ客船（フロントクラーク、世界一周）、スペイン留学、日本政府観光局勤務を経て、家族の対馬勤務が決まったことと、地方での子育てを希望し、島おこし協働隊を志望。北部対馬エリアの観光業の発展のため、英語での情報発信や案内所業務、対馬暮らしの魅力発信のため、子育てコミュニティ運営などに取り組んでいる。

◎荒井 勇人（あらい はやと） 自然共生チャレンジャー



【所 属】：農林水産部自然共生課

【着 任 日】：令和 4 年 10 月 1 日

【ミッション】

増えすぎたシカによって山の植物が激減し、生態系のバランスが崩れてしまった対馬において、シカの捕獲駆除をはじめとした自然と人の暮らしの共存に関する活動を通して、自然共生型社会の実現を目指す。

【プロフィール】

神奈川県逗子市出身。移住前は陸上自衛隊(静岡)、レザークラフト専門店(大阪)での勤務を経て、京都市から移住。妻の出身地が対馬であったことをきっかけに対馬を知った。自然共生型社会の実現を目指す為、前職の経験を活かし、対馬の生態系保全活動と有害鳥獣問題の解決に取り組んでいる。

◎中屋 桜（なかや さくら） 対州馬保存・活用支援担当



【所 属】：上対馬振興部上県行政サービスセンター

【着 任 日】：令和 5 年 4 月 1 日

【ミッション】

対州馬の保存を行うために、安定した繁殖管理を目指す。

また、島内住民に向けた対州馬活用機会の増加と、島外ファン獲得・交流人口増加を目指す。

【プロフィール】

岐阜県高山市出身。高校・大学で7年間在来馬の飼養管理・普及啓発活動に取り組む。対馬での実習に参加した際に、乗馬体験や子供乗馬教室など、積極的に対州馬の活用に取り組む関係者の思いに触れ、対州馬を通して人や地域に関わりたいと思い志願した。

◎岡本 遥香（おかもと はるか） SDGs 研究員



【所 属】：しまづくり推進部 SDGs 推進課

【着 任 日】：令和 5 年 4 月 1 日

【ミッション】

環境・社会・経済分野の統合的かつ戦略的なデータ収集・分析を行い、客観的なデータに基づく地域課題解決策を提案するとともにこれらを通じて当市における SDGs 推進に取り組む。

【プロフィール】

福岡県糟屋郡粕屋町出身。インターンシップ生として対馬に訪れ、自然の美しさ、人の温かさに触れ対馬に魅力を感じた一方で、海洋プラスチックごみ問題や、獣害、磯焼けといった深刻な問題を目の当たりにした。自分の目と耳で課題を知り、同世代の人を中心に対馬のことや SDGs のことを広く知ってほしいと思い志願した。

◎川邊 裕太郎（かわべ ゆうたろう） つしま人財コーディネーター



【所属】：しまづくり推進部しまの力創生課

【着任日】：令和6年4月1日

【ミッション】

産業や地域の担い手確保・「人財」育成の取組みとして、対馬づくり事業協同組合に対する支援やU I ターン希望者や市内在住者等へのマルチワーク推進に係る情報発信等に取り組む。

【プロフィール】

対馬市出身。長崎大学教育学部を卒業後、公務員として環境部や保健福祉部で勤務。生まれ育った対馬に貢献する絶好の機会だと確信し、移住を決心した。これまでに培ってきた「人事管理業務」「事業企画業務」等の経験を発揮し、つしま人財コーディネーターとして取り組みを進めている。

令和 6 年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告
(要旨)



© Maya Murata



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 釜坂 綾 (海の森再生支援担当)

I 令和 6 年度の活動成果

【藻場調査】対馬沿岸の過去・現在の藻場情報の収集や一元化を目的として、下記の調査を行った。アマモ場は今年度、**新たに 1 地点が消滅**したと考えられる。

- ・藻場調査(定点 3 地点 13 回、その他 5 地点 8 回)、潜水調査(3 地点 3 回)、水中ドローンによる藻場撮影(6 地点 7 回)
- ・アマモ場マップ作成(聞き取りおよび現地調査に基づく)

【藻場再生】減少著しいアマモの生息域外保全を目的として、屋外水槽での栽培試験を行った。また、協力要請を受けた施設や組織への情報提供および助言を行った。

- ・屋外水槽でのアマモ栽培試験(対馬市栽培漁業振興公社の屋外水槽を間借り)
- ・対馬での海藻種苗生産に向けた情報提供、各種調整(海藻バンクコンソーシアム)
- ・藻場再生活動についての助言(志多賀集落)

【普及啓発】海の魅力発信および磯焼けの現状を啓発する活動を行った。各教育機関等への出前授業と対馬市公式サイトを活用した情報発信に注力した。

- ・水槽展示の拡充(サイズ拡大 90 cm→120 cm、および水槽個数の追加 1→2 個)
- ・市公式サイトに「対馬の水産業を支える藻場」計 3 ページ、「島おこし協働隊 海の森再生支援担当の活動」計 5 ページを作成・公開
- ・出前授業/移動水族館(14 回)、おしえて市役所さん(1 回)、オンライン授業等(3 回)
- ・対馬学フォーラムでのポスター発表「アマモの屋外栽培試験」

II 今後の展開について

海の森再生支援担当の設置・到達目標である「若者が安心して漁業を営める島」を体現するため、研修制度等を活用し漁業での独立を目指す。若者の漁業新規就業のモデルケースとなれるよう尽力していく。退任後も引き続き、出前授業をはじめとした普及啓発活動に取り組みたい。

III 4 年間の活動を終えるにあたり感じたこと

磯焼けは全島に広がり、任期中に大型海藻が消失した地点も複数ある。原因究明及び効果的な対策の提案・実働組織 兼 普及啓発の場として、**研究拠点を島内に整備すべき**と考える。



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 岸本 亜寿沙 (コミュニティ支援(南部))

I 令和 6 年度の活動成果

1. 空き家関連
 - (1) 空き家バンクサポート
 - (2) にゃんむすび∞プロジェクト支援
 - (3) 定住のための空き家活用
2. その他
 - (1) 山羊を活用したコミュニティスペース作りの準備
 - (2) 第2回協働隊フェス実施
 - (3) その他コミュニティ支援

II 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動
 - (1) 空き家関連
空き家開拓と利活用の促進
 - (2) 山羊を活用したコミュニティスペース作り
2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項
 - (1) 移住者目線での空き家バンク運営

III 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題
新たな物を求めるのではなく、今ある資源、設備を活用していくということ
2. 対馬市への提案
島おこし協働隊の雇用形態、委託型の選択



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 橘田 ゆかり (北部対馬活性化プランナー)

I 令和 6 年度の活動成果

観光関連

- 資格取得(総合旅行業務取扱管理者、小型船舶特定操縦免許)
- 観光案内窓口での取り組み(英語でのインバウンド客対応、来訪者分析)
- 情報発信(Google マップ、総閲覧数 901 万回)
- 対馬からの日本入国者国籍分析(韓国の次に米国、台湾、カナダ、中国、タイ)

その他

- つしま森の教室(韓国から家族の参加者があり、対馬ならではのイベントとなった)
- 参加イベント(観光セミナー、起業セミナー、空き家改修ワークショップ)
- 第 2 回協働隊フェス(つしま森の教室、メモリアルプレート作りワークショップ)
- 先進地視察(長崎県地域おこし協力隊研修(五島、波佐見)、特定免許取得(福岡)、西海市観光体験ファムトリップ)
- その他の活動(インバウンドガイド、CATV レポーター、イベント司会、国スポ出場、(仮称)北部対馬アクションプラン検討委員)

II 今後の展開について

- 対馬での国際的な人材育成、英語でのガイド業務やツアーコーディネートなどに取り組んでいきたいと思う。

III 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

- 隣接する釜山、福岡など大都市からの流入を見据え、英語での情報発信、対馬の推進するエコツーリズムやアドベンチャーツーリズムに親和性の高い欧米豪をターゲットとした観光戦略の推進を提案したい。



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 荒井勇人 (自然共生チャレンジャー)

I 令和 6 年度の活動成果

1. ICT を活用した有害鳥獣対策と生態系被害対策
 - (1) TREL を用いた捕獲活動と実績
 - (2) ジオワナを用いた捕獲活動と実績
 - (3) 潜り込み式囲い罠捕獲実証実験
2. 銃器を用いた捕獲活動
 - (1) ハンティングドローンを用いた捕獲活動
 - (2) 共猟への参加
3. 地域イベント
 - (1) 第 2 回協働隊フェス
 - (2) ハンドメイドワークショップイベントへの出店

II 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動
 - (1) レザークラフト教室の運営
 - (2) 有害鳥獣捕獲駆除
2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項
 - (1) 島おこし協働隊の採用
 - (2) シカ、イノシシによる生態系被害対策

III 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力
対馬の豊かな生態系は大きな魅力の一つであると感じる。
様々な取り組みを地域の方や市職員などの協力や支えがある事で行う事が出来た。今後も対馬の発展に貢献できるよう努める。
2. 対馬への提案
対馬の自然環境は豊かでありながら、生態系被害や海洋資源の減少など多くの自然環境に関する課題がある。今後の対馬では、経済と自然環境の両立を目指した取り組みが大切だと考える。



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 中屋桜(対州馬保存・活用支援担当)

I 令和 6 年度の活動成果

1. 子ども世代に向けた対州馬活用

(1)親子乗馬会(2)教員対象乗馬会(3)対州馬少年倶楽部

2. 普及啓発活動

(1)出前授業(2)動物園での対馬イベント(3)対州馬イベント(4)実習受け入れ

3. 飼養管理データの蓄積

(1)体型データの蓄積(2)行動データの蓄積

4. 島外対州馬の調査

5. その他

- ・先進地視察(宮城県仙台市)
- ・メディア掲載 朝日新聞 2024/12/27「対州馬の魅力 身近に感じて」
- ・ハーモニイセンターキャンプ同行
- ・あいネットつしまベイパークスタンプラリー活動参加
- ・対馬空港対州馬展パネル展示(8～10月)
- ・協働隊フェス(対州馬乗馬体験)

II 令和 7 年度の活動予定

1. 乗馬教室の継続

2. 対州馬の飼養管理に関する調査の継続・拡大

(1)体型に関するデータの蓄積(2)GPSを用いた行動分析

III 1 年間の活動を通じて感じたこと

対馬は豊かな自然に恵まれ、ツシマヤマネコや対州馬といった希少な生物が生息している。

一方で、島外からのアクセスの不便さや公共交通機関の少なさにより、訪問者が馬や自然に触れる機会が限られている。また、対州馬が地域文化に根付いているものの、日常的に関われる場が少ないことも課題だと感じる。

子ども世代への普及啓発は、対州馬関係人口の創出に一定の成果を上げており、今後も継続が必要である。しかし、現場の人員だけで維持するのは難しく、協働隊の枠を継続し、教育活動を支える体制を整えることが求められる。また、対州馬の活用を島内にとどめず、島外の関心層へのアプローチを強化し、島外イベントや教育機関との連携、展示や貸し出しの機会を増やすことで、認知度向上と関係交流人口の拡大につながっていくと感じた。



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 岡本遥香 (SDGs 研究員)

I 令和 6 年度の活動成果

1. 島内の SDGs の調査・把握と発信
 - (1) SNS「SDGs 未来都市 対馬」Instagram 及び Facebook ページの開設・運用
 - (2) 第 2 回協働隊フェスでの出展
2. 資源循環について
 - (1) SDGs カフェでの発表
 - (2) 対馬 SDGs パートナーズ交流会での出展
 - (3) 対馬学フォーラムでのリペア・リメイクに関する発表
3. ESD・人材育成について
 - ・ 学校等での講話の実施(3回)やインタープリテーション講座への参加

II 今後の展開について

1. 退任までの活動予定
 - (1) 島内の SDGs 調査・発信
 - (2) 対馬における市民の消費行動の調査・分析
 - (3) 職員の SDGs 意識向上を目指す取り組み
2. 任期終了後の自身の活動
 - (1) 大学復学後、学内での活動:協働隊の活動で関心の深まった分野についての卒論執筆や対馬市インターンシップを経験した後輩とのイベントの企画等
 - (2) 大学卒業後の活動:就職し、対馬で取り組んだ活動に継続して取り組む
3. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項
 - ・ SNS「SDGs 未来都市 対馬」アカウントにおける情報発信

III 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題
 - ・ 魅力は、リアルな課題や現状を知ることができ、それらに取り組む熱意ある人々と出会えること。課題は、島民が対馬の多くの魅力に気づくことができておらず、島に誇りを持っていないこと
2. 対馬への提案
 - ・ 行政職員への SDGs についての学習機会や情報収集の場の提供



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏 名 川邊 裕太郎 (つしま人財コーディネーター)

I 令和 6 年度の活動成果

1. 対馬づくり事業協同組合で雇用する派遣従業員および派遣先事業者の確保
2. 対馬づくり事業協同組合の自立した運営を確立
3. 研修会および会議への参加

II 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動
 - (1) 市政への関り
 - (2) 対馬づくり事業協同組合の支援継続
2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項
派遣従業員および組合員確保のための取り組み

III 1年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題
魅力: 多くのビジネスチャンスが眠っている
課題: 接客・サービス面が本土に比べると見劣りする
2. 対馬への提案
島おこし協働隊のより積極的な継続募集

令和 6 年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告
(実績報告)



令和 6 年度島おこし協働隊 年 間 活 動 報 告 書

所 属 農林水産部 水産課
ミッション 海の森再生支援担当
氏 名 釜坂 綾

I 令和 6 年度の活動成果

1. 藻場調査関連

(1) 定点調査

2021 年 4 月から、アマモ場 2 地点とガラモ場 2 地点で 4 年間継続した調査を行った(調査の詳細は昨年度報告書を参照)。その結果、期間中に出現個体数が減少(△)、または確認できなくなった生物種(×)が複数存在することが明らかとなった。

2021 年以降、個体数が減少した種、または確認できなくなった種

アマモ場 魚 類:アシシロハゼ×、インガレイ×、オクヨウジ×、ヒメタツ×、ヨウジウオ×
海藻類:アオワカメ△、ウミトラノオ△、ジュズモ属の一種×、シキンノリ×

ガラモ場 魚 類:ガンテンイシヨウジ×

甲殻類:アシナガモエビ×、モエビ科の一種×

海藻類:ホンダワラ類(アカモク×、イソモク×、ノコギリモク×、ヒジキ△、マメタワラ△、ヤツマタモク×)、カヤモノリ×、ニシイワヒゲ×、ヒラムチモ×、ワカメ×、ジュズモ属の一種×



アシシロハゼ



ヨウジウオ



ウミトラノオ



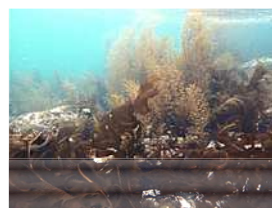
シキンノリ



モエビ科の一種



ヤツマタモク



アカモクとワカメ



ジュズモ属の一種



アマモ場では、主に藻場に依存する魚種の減少が顕著であった。タツノオトシゴをはじめとするヨウジウオ科の魚類は、海藻/海草に尾部を絡めるなどして体を固定し、藻場に発生する動物プランクトンを餌にするため、安定した藻場の存在が肝要である。

調査地では、高水温や食圧の影響等によりアマモが夏季に葉を落とす生活史に変化し、約4か月間、藻場のない期間が発生した。この環境の変化が上記魚種の大きな減少要因になったと考えられる。

海藻/海草類については2022年秋を境に大型海藻の減少が見られ、ウミトラノオは大型の藻体(藻長1m前後)が確認できなくなった。

ガラモ場では、主にホンダワラ類海藻の減少と、海藻に依存する甲殻類(モエビ類)の減少が見られた。定点調査地では2021年夏まで大型海藻であるホンダワラ類が繁茂していたが、その後の減少が著しく、2022年春の春藻場を最後に小型海藻藻場のみとなった。2025年2月時点で確認できる大型海藻は、ごくわずかに萌芽しているヒジキのみである。

モエビ類は藻場の普通種であるとともに、その食性や、海藻に隠れ捕食者から身を守る習性から藻場への依存度が高い。藻場の消失とともにモエビ類も生息適地を失ったものと思われ、2023年春以降、一度も確認できていない。

海藻が消滅する機序

ホンダワラ類の消滅機序として、複数種において以下のような流れが確認できた。

1. 母藻となる成体が、主に夏～初冬にかけて魚類等による食圧や波浪により減耗し、藻場が磯焼け状態となる。(1年目)
2. 磯焼け以前の成熟期(春ごろ)に周辺に放散していた幼胚(タネ)が発芽し、翌年春に藻丈15cmほどの幼体に生長する。(2年目)
3. 一時的に幼体が磯に繁茂するが、夏～初冬の食圧および波浪等によって消滅し、再び磯焼け状態となる。
4. 成熟株が無くなり、幼胚(タネ)の加入が起こらないため、翌年以降はわずかに残った付着根からの萌芽のみとなる。(3年目)
5. 個体数の大幅な減少によって藻場の回復は見込めず、**磯焼け状態が継続**する。

以上のように、**約3年をかけて恒常的な磯焼けが発生するものと考えられる。**

島内各地での聞き取り調査によれば、多くの地点で「1年で藻場が無くなった」との証言を得ている。広範に繁茂していた藻場が1年で無くなるほど植食魚が増加(=食圧が増加)したとすれば、これまで各地に分散していた植食魚が餌資源を求めて一か所に移動した可能性が考えられる。実際に潜水漁業者への聞き取りによれば、冬季に蛸集するノリスズミの個体数は増加しているという。

あるいは海藻が本来持っていた生体防御機構(例:ポリフェノール類による苦み成分等)が何らか

の要因によって正常に機能しない状態となり、食圧を防ぐ手段が失われたことで急激な食圧(＝磯焼け)が起こった可能性についても調査すべきと考える。

磯焼け後に増加した種(現在の優占種)

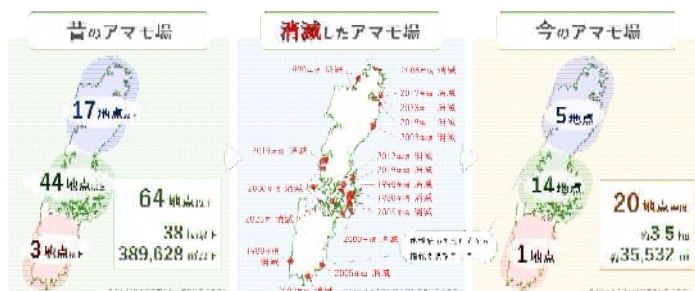
大型海藻が見られなくなったガラモ場では、以下の小型海藻が優占する状況となっている。
[フクロリ、シオミドロ属、有節サンゴモ類、アミジグサ類、カゴメノリ(繁茂面積の多い順に記載)]

昭和 50 年代に厳原町で実施された藻場調査結果によれば、いずれの種も以前から確認されているが、当時は主に大型海藻の陰に低密度で生息していたと記録されている。これらの海藻の“大増殖”は磯焼けの原因ではなく、大型海藻という競合種が不在となった結果であると考えられる。

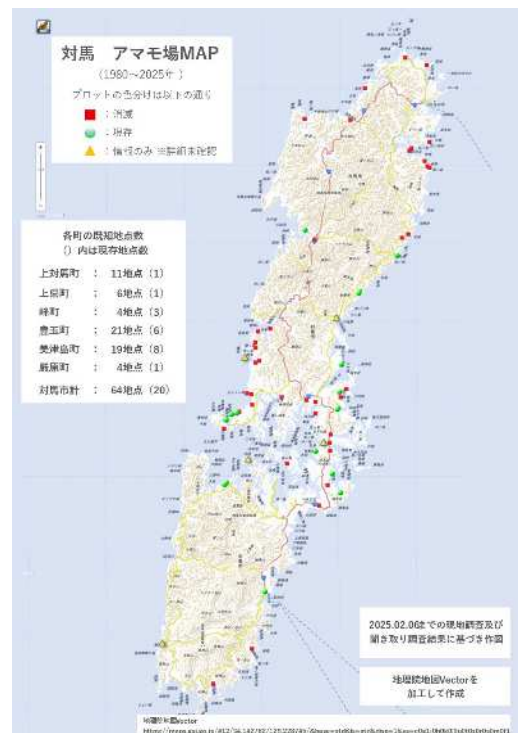
(2) アマモ場マップ作成

聞き取り調査を行う中で、アマモ場について複数の情報が集まった。多くは 1980 年から 2015 年頃にかけて消失したという情報であったが、対馬島内におけるアマモ場の公的かつ網羅的な記録は皆無に近いため、一元的なアマモ場マップを作成することとした。

その結果、対馬沿岸には少なくとも 64 地点のアマモ場が存在したことが明らかとなった。しかし、現存するのは 20 地点で、地点数は 40 年間で約 71%減少したと考えられる。しかし現時点で全ての海岸線の調査完了には至っておらず、今後も継続した調査が必要である。



消滅したアマモ場と地点数

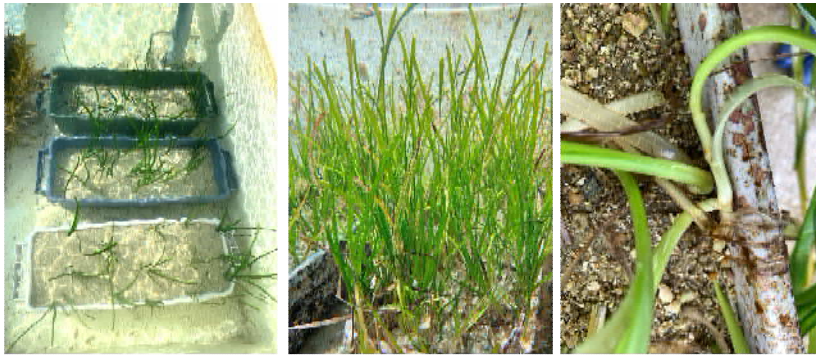


アマモ場マップ

2. 藻場再生関連

(1) 屋外水槽でのアマモ栽培試験(対馬市栽培漁業振興公社の屋外水槽の一部を間借り)

海域での減少が著しいアマモの生息域外保全に向けた栽培試験を昨年度の秋から行っている。2023 年 11 月～2024 年 11 月までの 1 年間で、アマモの株数は 7.3 倍(30→219 株)に増加した。期間中の最高水温は 31.8℃で、30℃を超える日が 14 日間続いたが、枯死することなく生存した。



実験開始時の様子(2023.11.01) 実験終了時の様子(2024.11.24) 株が分枝している様子

本実験により、美津島町賀谷のアマモは、海水かけ流しの屋外水槽であれば正常に開花・結実し、夏季も葉を落とすことなく越夏することが確認された。

この結果から、アマモの生息域外保全策として、屋外水槽を用いた維持・増殖法を提案する。これにより地域個体群の絶滅リスクを減少させることができる。一方、増殖させた株の実海域への移植にあたっては、地点間の遺伝的集団構造を把握した上で、地点ごとにアマモの減少要因を精査し適切な環境改善を行う必要がある。闇雲な種子散布や株の移植はアマモ資源の消費的行動に過ぎないため、慎重な動きが求められる。

(2) 対馬島内での海藻種苗生産に向けた情報提供、各種調整

経済産業省関連(GI 基金)の事業である「海藻バンクコンソーシアム」が対馬市内で海藻の種苗生産を開始するにあたり、島内の藻場の現状や母藻の現存状況についての情報提供依頼を受けた。対馬市内における藻場再生活動の課題の一つに、島内産の海藻種苗の供給が不足しているという実態があるため、全面的に地点情報などの提供・協力を行った。その結果、アカモク、キレバモクについては島内産の母藻を使用した種苗生産の実現につながった。

(3) 藻場再生活動についての助言(志多賀集落)

志多賀集落の藻場保全組織から、今後の活動の指針となる情報を提供して欲しいとの依頼を受け、資料を作成し説明を行った。その他必要な情報については対馬水産業普及指導センターなどへの協力要請および助言依頼を行った。

3. 普及啓発関連

(1) 水槽展示の拡充

令和3年度末から、厳原庁舎玄関で普及啓発事業として藻場水槽の展示を行っている。効果調査のため実施したアンケートにおいて「水槽を大型化して欲しい」という意見が複数あったことを受けて、これまでの幅90 cm×高さ45 cm水槽に加えて幅120 cm×高さ60 cm水槽を追加導入し、水槽の大型化および展示台数の拡充を行った。これにより、アマモ場水槽とガラモ場水槽の2つを比較



展示することが可能となった。水槽展示の拡充に伴い、水槽上部の藻場解説パネルもリニューアルし、潜水写真を活用するなど、内容・サイズともに充実させたものを掲示している。

(2) 対馬市公式サイトでのページ作成・公開

前項の藻場解説パネルは厳原庁舎への来庁者にしか見ていただくことができない。さらに普及啓発効果を高めるため、対馬市公式サイト上に同様の内容をまとめたページを作成(全3ページ)し、令和6年4月から公開した。併せて、海の森再生支援担当の活動紹介ページも作成(全5ページ)し、公開している。



対馬の水産業を支える藻場



島おこし協働隊 海の森再生支援担当の活動

(3) 教育機関等への出前授業・移動水族館

情報発信・普及啓発に関して、特に高い普及啓発効果を得られるのは教育現場であると考えている。教員免許(高校・水産)取得によって得た知識等を活かし、令和4年度以降、各学校で出前授業や移動水族館を実施してきた。今年度は市内外から17件の依頼を受け、授業等を行った。

今年度の特色として、通常のクラスでの授業の他にオンラインでの講話や遠隔交流学习の依頼が複数件あったことが挙げられる。対馬市という枠を超えて、全国各地の子どもたちに対馬の水産業や藻場、磯焼けの話をすることができた。これは、これまでの情報発信や人脈形成の結果が表れたものと受け止めており、今後も継続していきたい。

(4) その他の普及啓発活動

対馬市CATVで放送されている「おしえて！市役所さん」で対馬の海藻に関する解説を行った。また、対馬学フォーラムではアマモ栽培試験の結果についてポスター発表を行った。

その他、「国境の島・海の魅力発信隊」に任命されていることもあり、SNS(Instagram、Facebook)を活用し対馬の海を中心とした自然環境についての情報発信を行っている。

Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

漁業研修を受け、漁業者としての独立を目指す

海の森再生支援担当の設置・到達目標である「若者が安心して漁業を営める島」を体現するため、研修制度等を活用し漁業(延縄など)での独立を目指す。若者の漁業新規就業のモデルケースとなれるよう尽力していく。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項



(1) 水槽展示

一定の普及啓発効果があり、継続を希望する市民の声もあるため、可能であれば期間の定めなく継続して欲しい。

(2) 海洋教育の実施

授業スライドに関してはブラッシュアップを重ね“対馬らしい海洋教育”のひとつの形を示せたと感じる。可能であれば継続および体系化された授業カリキュラムとして展開して欲しい。

Ⅲ 4年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

毎年記載しているが、対馬の魅力は人の暮らしのそばに豊かな自然があることである。生活圏のすぐ近くに山や海があり、特に陸域では固有種をはじめ対馬ならではの魅力あふれる生物が数多く生息している。海は日本各地から釣り人が訪れる釣りの聖地であり、高級魚とされる魚種も自分で釣って味わうことができる。理想的とも言える“島暮らし”が実現できるのが対馬の何よりの魅力である。

一方で、こうした“自然環境の大切さ”に気付いていない島民が少なくないことが課題ではないかと感じる。国家レベルでは自然環境の捉え方はアップデートされており、現在では、直接・間接を問わず様々な利益(生態系サービス)を持続的に生み出すものという認識が環境基本法などに明記されている。しかし、依然として自然を無価値のものと捉えている方々もいるようで、山も海も不法投棄されたゴミが必ずと言っていいほど目に付く。海岸への漂着ゴミは日本・対馬以外に由来するものも多いことが調査結果から明らかとなっているが、陸域の不法投棄はほぼ確実に対馬で捨てられたものである。対馬固有種のサンショウウオ類が産卵する小河川では、ビールの空き缶がまとめて捨ててあり、弁当ガラや電球、TV や自転車が転がる光景をよく目にする。以前、対馬に暮らす生き物好きな子どもたちを連れてサンショウウオ観察に行った際、子どもたちがゴミをどかしながらサンショウウオを探していた光景は忘れられない。対馬のこれからを担う子どもたちに大人が残すのは、自然を尊重し、ともに生きる自然共生型の持続可能な対馬の姿であって欲しい。

今の対馬では、自然環境は良くも悪くも当たり前の存在である。この距離感を大切にしつつ、“悪い意味での当たり前”を改め、“良い意味で当たり前”という考えが対馬市民にとっての共通認識となることを願っている。

2. 対馬への提案

藻場の調査研究を行う拠点が島内に必要であると感じている。海洋教育の推進においても、“そこに行けば学べる施設”が存在することは大きな後押しとなる。市が必要性を認識して募集した海の森再生支援担当の大きなミッションは「藻場調査・普及啓発」である。このテーマが体现された施設が対馬に出来ることを期待している。

海の森再生支援担当 出前授業・移動水族館等 実施内訳

令和3年度	0 回
令和4年度	5 回
令和5年度	13 回
令和6年度	18 回+α

	日時	訪問先	学年等	実施形態	内容	メディア
令和4年度						
1	9月13日	厳原北小学校	4	出前授業・移動水族館、海藻アート	海、魚、海藻、海藻アート	NIB
2	10月12日	厳原北小学校	1～6	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻	
3	11月24日	仁田小学校	河川クラブ	活動補助	河川環境、河川生態系	
4	12月5日	美津島北部小学校	4～6？	海洋教育（鴨居瀬地区藻場保全組織の前座）	アマモ	朝日新聞等
5	2月7日	厳原北小学校	4	出前授業	アマモ、海藻アート	
令和5年度						
6	6月16日	豆酏中学校	1～3	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻、キャリア教育	
7	6月27日	今里小学校	5・6	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻、水産流通	
8	6月30日	豊玉小学校	2	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻、海ゴミ	
9	7月2日	つしま森の教室	未就学児等	生物観察会	磯の生物観察会	
10	7月7日	豊玉小学校	2	出前授業、生物観察会	河川の生物、河川の生物観察	
11	9月10日	島外企業等研修	－	講演	海、水産業、海藻	
12	9月21日	東部中学校	3	インタビュー対応	磯焼け、移住の経緯、協働隊	
13	10月6日	仁田小学校	1～4	出前授業、生物観察会	河川環境、河川の生物観察	
14	10月13日	西小学校	5・6	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻	
15	11月8日	長崎東高校	2？	インタビュー対応	自然環境、河川生態系等	読売新聞等
16	11月22日	学校事務職員研修会	事務職員	講演	海洋環境、水産業、磯焼け	
17	12月8日	美津島北部小学校	4～6	海洋教育（鴨居瀬地区藻場保全組織の前座）	海藻・海草、移動水族館	
18	3月21日	豊玉小学校	2	海釣り体験実習	延べ竿釣り体験	CATV
令和6年度						
19	4月26日	佐須奈小学校	3・4	生物観察会	用水路の生物観察	
20	6月10日	厳原小学校	6	出前授業・移動水族館	海、魚、海藻、海ゴミ、キャリア	
21	6月28日	仁田中学校	2	出前授業、河川の生物観察会	河川環境、河川の生物観察	
22	7月21日	つしま森の教室	未就学児等	生物観察会	磯の生物観察	
23	8月19日	やまねこ児童クラブ	学童	出前授業・磯の生物観察会	海、魚、海藻、海ゴミ、観察会	
24	9月17日	佐須奈小学校	授業準備	河口の生物採取、展示水槽設置	佐護川流域～海の生物	
25	9月24日	佐須奈小学校	3・4	河川の生物観察会	佐護川本流の生物	
26	10月8日	虹の原特別支援学校	高2	授業、簡易水族館（生徒さんが来庁）	対馬の海、魚、藻場、海ゴミ	
27	10月29日	オンライン	幼～高	WEB講義（オンラインコミュニティ）	対馬の海、魚、藻場、海ゴミ、キャリア	
28	11月26日	オンライン	小3・4	離島の小学校の遠隔交流授業（オブザーバー）	コメント程度	
29	11月27日	虹の原特別支援学校	高2・3	食育学習（魚捌き）のサポート		
30	12月5日	厳原小学校	5	水産教室（魚捌き）での講話	藻場、磯焼け、海ゴミ	
31	12月11日	佐須奈小学校	3・4	長崎大学との遠隔交流授業（オブザーバー）	コメント程度	読売新聞等
32	1月15日	美津島北部小学校	3～6	海洋教育（鴨居瀬地区藻場保全組織の前座）	海、魚、藻場、移動水族館	
33	1月16日	雞知中学校	1	水産教室（魚捌き）での講話	藻場、磯焼け、海ゴミ	
34	1月20日	久田中学校	1	水産教室（魚捌き）での講話	藻場、磯焼け、海ゴミ	NBC
35	1月28日	今里小学校	5・6	水産教室（魚捌き）での講話	藻場、磯焼け、海ゴミ	
36	2月15日	協働隊フェス	未就学児等	模擬授業、移動水族館	藻場、磯焼けなど	
	3月14日	大学生		視察のアテンド、講話	対馬の海、水産業、藻場 など	CATV

令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書

所 属 地域づくり課
ミッション コミュニティ支援(南部)
氏 名 岸本 亜寿沙

I 令和 6 年度の活動成果

1. 空き家関連

(1) 空き家バンクサポート

前年度に引き続き、空き家バンクの現地確認、登記情報等から考えられる問題点への助言等を行った。

今年度に関しては、重要土地調査法の特別注視区域内の物件があり、届け出等の案内は売主、買主の一方だけではなく両方に、案内は 1 度だけではなく何度も行うよう助言をした。次年度に関しては建築基準法の改正があるため、確認申請が必要となる物件が多くなることから注意するよう伝えている。

(2) にゃんむすび∞プロジェクト支援

前年度より継続して行われているプロジェクトであり、鹿児島県にてコミュニティ大工として活動している加藤氏を招き行われた DIT (Do It Together) イベントのサポートをおこなった。今年度のイベントは 4 月と 10 月に行われ、10 月のイベントにて完了となった。イベントで改修をおこなった住宅は「ねこや。」として今後、インターン生の受け入れや、移住希望者たちが滞在できる拠点として活用予定。改修が進んで行くことで、視察で訪れる人も増えてきており、今年度に関しては大学の建築系ゼミで対馬を訪れていた教授と学生が看板をみて立寄ってくれたり、県職員の方や、韓国から同じようなイベントを行っているチームも参加してくれた。イベントが完了してからも視察の希望



が何件か来ていると MIT より伺っている。残念に思うことは、個人的に手伝いに来てくれた市の職員は 2 名いたが、視察として見に来られた方は 1 人もいなかったということである。

(3) 定住のための空き家活用

着任当初より空き家の活用をしたいと考えており、3年目に入り定住のための活動が可能となったことから、空き家の活用を目的とした定住のための活動を始めた。定住のために選んだ物件は、空き家歴 10 年以上の物件であり、水回りは全て交換ではあったが、その他に関しては比較的状態がよく、土日利用し夫婦で DIY 改修を行った。改修は、12 月から3月にかけて行った。これまでに行っていた DIY イベント等の知識が役立ち退任後の拠点として空き家を住まいとして利活用できたと感じている。こちらの改修模様に関しては、対馬での空き家活用の一例として、今後インスタ等で発信する予定である。



キッチンとリビングのビフォー・アフター比較写真

2. その他

(1) 山羊を活用したコミュニティスペース作りの準備

対馬では自然が多いにも関わらず、動物と触れ合える機会が非常に少ないと感じていた。小さな子どもでも触れ合うことができ、比較的飼育しやすいと言われている山羊の飼育を行い、山羊とのふれ合い体験や耕作放棄地の対策、人が集まれるコミュニティスペースを作りたいと考え、山羊の飼育を学ぶために大分県の木村山羊牧場に研修へ行った。



牧場では主に山羊の世話を学び、注意すべき点、様々な対策に関して学び、牧場主とは山羊に関して相談することができる先生として現在も付き合いを続けている。

飼育する山羊に関しては長崎原産種のシバヤギを考えており、原産地と言われている長崎市外海地区で、シバヤギ飼育者の拡大事業をおこなっている「NPO 夕陽が丘そとめ」との連携のために個人的にもイベントや勉強会に参加。その際に長崎市にて遊休農地を活用してふれあいヤギ牧場(ヤギのいる農園りもねん)を作っている矢野氏とも知り合い、お互いに情報交換等を行っている。次年度は5月末までと僅かな期間ではあるが、引き続き飼育の準備、飼育場所の整備を行っていく。また、ふれあい体験、観光農園等を行っていくために第一種動物取扱業の取得を目指す。

(2) 第2回協働隊フェス実施

昨年度に引き続き協働隊フェスを実施した。

10月より計画をしていたが、準備の動きだしが良くなく、準備に関しては前年度の経験が全く活かされていない結果となってしまったことは反省点である。

次年度開催されるかは未定であるが、新しく着任する隊員がスムーズに企画を進めていけるよう、資料やフロー表を作成して活用できるようにしていく。

(3) その他コミュニティ支援

子ども劇場運営サポート

アートプロジェクトサポート

地区行事サポート

地域おこし協力隊研修参加

Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

(1) 空き家関連

上対馬を中心とした事業者と協力し空き家開拓とDITの推進、空き家の利活用を行う。

(2) 山羊を活用したコミュニティスペース作り

舟志にて山羊の飼育を行い、ふれあい体験や人が集まれる場所づくりを行う。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1) 移住対策としての空き家バンク運営

現在の空き家バンクでは、所有者目線での運用になっているように感じるが、次年度より建築基準法改正に伴い改修費用が今よりも多くなることが予想される。他地域より移住してくる移住者の目線で運用できるようブラッシュアップし、新たな施策を考え引き続き取



り組んで欲しいと願っている。

Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬に移住して3年が経とうとしており、その中で感じる魅力は自然が本当に豊かであるということである。しかしながら、同時にその自然を活かせてないとも感じる。

対馬は、山が多く平地が少ないと聞けるが、広大な耕作放棄地が広がっていることも事実である。せっかくの自然も手を全く入れていないと景観を悪くしてしまい、対馬の印象を悪くしてしまう。新しい施設、設備をという考えもわかるが、今あるものを放置せずに整備、活用していくことも必要になってくるのではないだろうか。

また、3年間対馬で暮らし、対馬の人たちは本当に暖かく優しい人が多いと感じる。それと同時に、受け身の人たちが多いということも感じている。もっと自ら動くことができるようになれば地域が活性化していき、よりよい対馬になっていくのではないかと思う。

2. 対馬市への提案

島おこし協働隊を会計年度任用職員ではなく委託型として採用することを提案する。

地域おこし協力隊は行政ではできない柔軟な地域おこし策をしていくということが本来の目的のはずであるが、会計年度として着任するとどうしても役場職員として制限されることが非常に多いと感じている。委託型にすることで任期中に起業することもでき、結果定住率もあがるのではないだろうか。他地域でも委託型が増えていることから、今後の選択肢として委託型の協働隊の募集をしてもよいのではないかと提案する。

令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書

所 属 上対馬振興部
ミッション 北部対馬活性化プランナー
氏 名 橘田 ゆかり

I 令和 6 年度の活動成果

1. 観光関連

(1) 資格取得

昨年度から取り組んでいた総合旅行業務取扱管理者(国家資格)を取得し、旅行会社の設立が可能となった。また、クルーズ船勤務時代に取得していた一級小型船舶操縦士資格に特定免許を追加取得し、遊覧クルーズ運行ができる環境を整えた。

(2) 観光案内窓口での取り組み

- 国際港である比田勝港観光案内所において、インバウンド客の窓口対応、情報の英語翻訳、レンタカーの予約支援などを実施した。窓口へは、ドイツ、マルタ、イタリア、オーストラリア、香港、デンマーク、アメリカ、オランダ、スウェーデン、ベルギー、イギリスなどさまざまな方が今年度来



訪した。韓国人 FIT(個人旅行者)がロッカー用の小銭への両替や一日バスチケットの購入を求めることがほとんどであることに対して、その他の英語対応を行う来訪者は、(英語の地図はラックに配置しておらず手渡しすることもあり)、おすすめの観光スポットの話などより“観光案内”が求められていると感じた。韓国人以外の窓口外国人訪問者は依然少数だが、増加傾向にある。特に、韓国人(日本)入国者の 8% のみが窓口を利用しているのに対し、その他の外国人は 37%が観光窓口を訪れており、英語での対馬観光情報の入手が島外では難しいことがうかがえる。

項目	その他の外国人	韓国人
R5案内所訪問者数(厳原比田勝合計)	478	13,167
R5入国者数(厳原比田勝合計)	1,304	162,050
入国者：案内所訪問者割合	37%	8%

- 観光物産協会月報用の窓口対応者数のカウント方法を厳原ふれあい処の窓口と統一したところ、2024 年 8 月の比田勝窓口の訪問者数は前年同月比 2.19 倍となった。2025 年 1 月の外国人の対応件数は厳原 363 件、比田勝 3,328 件となっており、



対馬の韓国人観光客への比田勝港での対応数の多さがわかるようになった。比田勝の観光案内窓口は入国後アクセスしやすい場所にあり、今後強化できると良い。

(3) 情報発信

Google マップでの投稿を続け、3 年弱で 2,478 投稿、総閲覧数 901 万回を記録した。ローカルガイドのレベルもあと少しで 8 に達し、影響力のある口コミが可能となった。(ガイドレベルの高い口コミは優先的に表示される) 金田城(山頂)の投稿は 17,814 回、比田勝国際ターミナルの投稿は 9,705 回の閲覧数を記録した。

(4) 対馬からの日本入国者国籍分析

対馬ではインバウンド＝韓国旅行客がほとんどとなっているため、それ以外の国へ目を向けることが少ない。出入国在留管理庁の公開する、出入国管理統計表から抽出してみると、(対馬～釜山国際航路は 2023 年 2 月再開)2023 年 1 月から 2024 年 10 月までの間で 67 か国もの方が対馬から日本へ入国しており、韓国の次に、アメリカ、台湾、カナダ、中国、タイと続いた。エリア別では東アジアの次に北米が多い。島内事業者へ韓国以外のインバウンド客についてのヒアリングを行ってみたが、まだまだ対応件数は少なく、受け入れ数の多かった欧米豪インバウンド客はクルーズ船関連(団体客)だと思われる。

※対馬空港からの来島者(インバウンド)はすでに別の場所で日本国内へ入国しているため、数には含まず、厳原、比田勝からの入国。

エリア別合計 (Jan23-Oct24)	人数
東アジア	276,891
北米	1,139
ヨーロッパ	380
東南アジア	174
オセアニア	127
中南米	77
西アジア	13

入国者数 順位	国名	国籍合計 (Jan23- Oct24)	割合 (Jan23- Oct24)
1	韓国	276,816	99.14%
2	米国	976	0.35%
3	台湾	178	0.06%
4	カナダ	163	0.06%
5	中国	117	0.04%
6	タイ	116	0.04%
7	オーストラリア	88	0.03%
8	英国	87	0.03%
9	中国(香港)	80	0.03%
10	ドイツ	79	0.03%
11	フランス	68	0.02%
12	ニュージーランド	39	0.01%
13	イタリア	32	0.01%
14	ニュージーランド	30	0.01%
15	オーストラリア	29	0.01%
16	スペイン	26	0.01%
17	メキシコ	20	0.01%
18	オーストラリア	19	0.01%
19	ベトナム	18	0.01%
20	ブラジル	16	0.01%
21	スウェーデン	15	0.01%
22	スイス	14	0.01%
23	トルコ	13	0.00%
24	ドミニカ共和国	11	0.00%
25	シンガポール	11	0.00%
26	ロシア	11	0.00%
27	パキスタン	10	0.00%
28	パキスタン	10	0.00%
29	デンマーク	10	0.00%
30	インドネシア	9	0.00%

2. その他

- 今年度は資格取得に取り組んでいたため、開催が少なくなりましたが、つしま森の教室(こどもの自然体験活動)に関連して、壱岐のプレーパーク視察を行った。また、対馬釜山事務所の HP にイベントポスターを掲示していただいたところ、韓国人家族の方が参加してくださり、国際交流と自然体験を合わせた対馬オリジナルのイベントとなった。今後も少しずつこのような機会を作れたらと思う。

(2) 参加イベント、先進地視察

- 観光 DX (Next tourism summit2024)、よろづ支援拠点、地方×こども(デュアルスクール)、サステナブルツーリズム、ライティングセミナー、インバウンドサミット、ガイド研修(白嶽酒造、インバウンドガイドカヤック)、JOIN 創業オンラインセミナー、空き家改修ワークショップ(佐須奈)、壱岐地域おこし協力隊とのオンライン交流等への参加。
- 第2回協働隊フェスでは、つしま森の教室として、海洋プラスチックを活用したメモリアルプレート作りワークショップを開催した。
- 先進地視察では、長崎県地域おこし協力隊研修(五島、波佐見)、特定免許取得(福岡)、西海市観光体験ファムトリップに参加した。



(3) その他個人活動など

CATVレポーター、イベント司会、インバウンド旅行者のガイド業務、WEBライター、国際会議ツアーの英語説明、スタートアップ事業サポート、国民スポーツ大会出場、国境マラソンボランティア、外国人インフルエンサー招請のサポート等を行った。また地域の活動としては、海業、上対馬高校の魅力化、(仮称)北部対馬アクションプラン検討委員などに参加している。今後もヨソモノ視点をいかせればと思う。



Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

対馬への観光客はほとんどが韓国の方であるが、韓国では日本以上に少子高齢化が進んでおり、長期的な将来の観光需要は変化も予想される。韓国以外の国々をもターゲットとした観光施策を対馬で推進するため、対馬での国際的な人材育成、英語でのガイド業務やツアーコーディネートなどに取り組んでいきたいと思う。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1) 地域おこし協力隊の採用

現在、一ミッションに一人の配置となっているが、複数名体制を導入することで、より効果



的な活動が可能となる。特に観光や情報発信に関しては、チームを組むことによってより効果を発揮することができると思う。都市部から対馬に地域おこし協力隊を配置することで、隊員の家族や知人が訪れ、それだけでも対馬の PR につながる。今後より多くのミッションで地域おこし協力隊を募集し、対馬への移住者、関係人口を増やして行けたらよいと思う。

Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬は豊かな自然や歴史文化を有し、“国境の島”、また海洋プラスチックなど、国際課題の先進地として国際的な観光地となり得る。しかし、情報発信の不足や英語対応の遅れが課題である。

2. 対馬への提案(英語対応と欧米豪への発信強化)

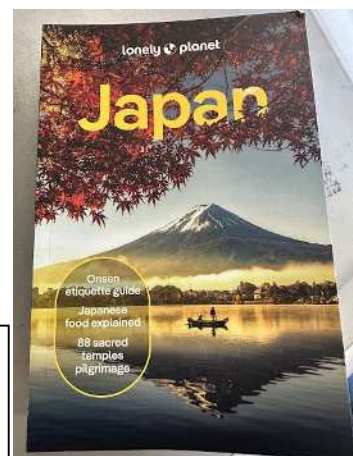
対馬は、国境の島として、地方都市でありながら、隣国・韓国の大都市である釜山に隣接するという特徴を持つ地域である。釜山には駐在者、大学生などを始め、約 5.5 万人の外国人が在住しており、(内、約 1,700 名が日本人。釜山広域市データベースより。)この地理的特性を活かした観光振興が求められる。対馬の観光振興にはさらに、福岡との連携が不可欠だ。特に、欧米豪の旅行者は福岡を起点に長期の日本旅行をするケースが増えており、新幹線を利用して広島・京都・東京へと巡る傾向がある。福岡は韓国・仁川空港からのアクセスが良く、仁川空港発着便は、国際線の運賃も比較的安価であるため、欧米豪からの訪日客の玄関口としての役割も強まっている。

当初、地理的に東南アジア圏が対馬の次のインバウンドターゲットと考えていましたが、福岡県の外国人延べ宿泊数を見ると、欧米豪(米国・豪州・英国・フランス:23,920 人)が、東南アジア(タイ・フィリピン・シンガポール・ベトナム・マレーシア・インドネシア:14,570 人)を大きく上回っています(2023 年 7 月迄)。

欧米豪の旅行者は歴史や伝統文化、自然への関心が高く、長期滞在する傾向があります。これは対馬が推進したいアドベンチャーツーリズムやエコツーリズムと親和性が高く、より適した市場であると言えます。

欧米豪の旅行者に向けて、まずは、日本旅行の旅程に「対馬を加えたい」と思ってもらうため、対馬の魅力を伝えるイメージ戦略や英語での情報発信が不可欠です。世界的な旅行ガイド「Lonely Planet」などへの掲載を目指すなど、英語での情報発信を強化、釜山福岡との広域連携を進めていくことを、対馬市へ提案できればと思います。

2024 年 4 月第 18 版には世界的に人気の出た対馬が舞台となったゲームなどがあつたにも関わらず、「TSUSHIMA」という単語は登場しなかった。



令和 6 年度島おこし協働隊 年間活動報告書

所 属 農林水産部 自然共生課
ミッション 自然共生チャレンジャー
氏 名 荒井 勇人

I 令和 6 年度の活動成果

1. ICT を活用した有害鳥獣対策と生態系被害対策

対馬にはシカの食害による影響で農林業や希少な動植物へ深刻な被害を及ぼしている。特に自然生態系保全の必要性が高いエリアを中心に、ICT 機器を活用した効率的な捕獲を行い、被害の軽減に努めた。

【活用した ICT 機器】

◇ 通信機能付き自動撮影カメラ TREL 4G-R (以下 TREL)

赤外線センサーで熱を感知し、リアルタイムで画像を送信する。携帯電波を介して送受信する為、電波圏外では不向き。画像で判断できるため、出現頭数の把握や捕獲の有無など様々な状況を柔軟に把握できる。



(通信機能付き自動撮影カメラ TREL 4G-R)

◇ GeoWana システム(以下ジオワナ)

携帯電波の届かない環境でも通信インフラを構築できる捕獲通知システム。TREL ではカバーできない携帯電波圏外で活用。子機のマグネットが外れると捕獲通知がメールにて送信される仕組みとなっている。個体の状況については判断できない事や誤作動などがあり柔軟に対応する必要がある。使用する機材が多い事と機材の設置に多少の時間を要する。



(GeoWana システム 子機)



(1) TREL を用いた捕獲活動と実績

長板浦(鶏知)や、濃部の集落付近にて TREL を活用し、捕獲を行った。

TREL を用いてモニタリングを行い、出現頻度、いつも通る獣道や滞在する時間が長い場所などを分析し、わな設置場所の選定を行なう事で効率的な捕獲に繋がった。

画像で捕獲個体を判断できるため、食肉利活用として事業者に連絡する際には、事前に状況を伝える事が可能になる点などがメリットと考える。

以下の表はくくり罠による捕獲の結果である。

場所	捕獲期間			捕獲 努力量	作業人日数	捕獲日	雌雄	種	頭数
	開始日	終了日	設置日数						
長板浦	4月17日	4月27日	11	34	4	4月24日	♂	イノシシ	1
	5月7日	6月14日	39	145	13	5月14日	♀	イノシシ	1
						5月16日	♂	シカ	1
濃部	5月24日	6月14日	22	74	7	-		-	
	7月4日	8月7日	35	528	14	7月25日	♂	イノシシ	1

※捕獲努力量 (罠設置数×設置罠日数)

(2) ジオワナを用いた捕獲活動と実績

濃部地域の携帯電波の届かない谷部にて通信環境を構築し、捕獲通知があった際の捕獲判断材料として活用した。また、通信機能を持たない自動撮影カメラを使い、出現頻度、いつも通る獣道や滞在する時間が長い場所などを分析し、わな設置場所の選定を行った。ジオワナを使用していて、捕獲通知の誤作動や捕獲個体の判断が出来ない点、機材設置の手間などを考えると、通常の見回り作業を行う事との差別化をすることが難しいように感じた。以下の表はくくり罠による捕獲の結果である。

場所	捕獲期間			捕獲 努力量	作業人日数	捕獲日	雌雄	種	頭数
	開始日	終了日	設置日数						
濃部						7月13日	♂	イノシシ	1
	7月4日	8月7日	35	528	14	8月2日	♂	シカ	1
						8月5日	♂	イノシシ	1
	2月19日	捕獲中	-	-	-	2月22日	♂	イノシシ	1

(3) 潜り込み式囲い罠捕獲実証実験

昨年度より捕獲実証実験を行った潜り込み式囲い罠について、前回の反省点を踏まえて改良を施し、6月上旬から12月上旬まで実証実験を行った。

今回の実証実験での主な改良点は以下の3点である。

I. 囲い罠の大きさ

前回のサイズ[高さ2m×幅2m×奥行4m]だと一度に2頭の捕獲が限界であり、より多くの捕獲頭数を目標とする為、[高さ2m×幅4m×奥行10m]に拡大し、複数頭捕獲するため

のキャパシティーを改良した。

II. 潜り込み式ゲートからケリ糸と連動したゲートの仕組みへ

穴や隙間から潜り込むシカの習性を利用した入り口では捕獲が困難と判断し、ゲートを釣り糸で吊り上げ、ケリ糸と連動させてゲートを落下する仕組みに改良。

III. 設置場所の選定

なるべく露出していない場所。シカにとって安心できる場所。囲い罫内に立木等がある事で警戒心が高まりにくいとされるような場所を選定。これらの点を改良する事でどのような結果になるか検証し捕獲実験を行った。

<結果>

雄シカ 1 頭を11/20（木）深夜、TREL にて捕獲を確認。

翌日、現場で止め刺しの準備をしていると、暴れた事で破損した箇所から逃走される結果となった。破損箇所はネットの接合部であり、耐久強度が足りなかったことが原因と考える。

まだ様々な検証が必要であるが、捕獲までに多くの時間がかかる為、今後の運用については検討する必要がある。



(TREL にて捕獲を確認)

2. 銃器を用いた捕獲活動

(1) ハンティングドローンを用いた捕獲活動

ハンティングドローン「UD4JH」とは、スピーカーを搭載し空中から犬などの鳴き声を大音量で響かせ鳥獣を追い込むことが可能な中型ドローン。機体前方にカメラ、機体側面部にはリモート発射が出来る「鳥獣駆逐用煙火」を搭載でき、煙火の爆発音で鳥獣を追い込むことも可能である。

ハンティングドローンを用いた事業捕獲のドローン操縦手として参加。

ドローンを活用することで最小限の人員で効率的な鳥獣駆除効果を得られるか検証した。ハンティングドローンを用いた捕獲成果については、理想的な結果とはならなかったが、操縦回数を重ねていく事で運用方法や、シカが動くコツなどが分かってくるように



なった。運用方法や要因などを調査し、様々な検証を含めて改善していく必要があると感じた。

(2)共猟(グループ猟)への参加

今後、有害鳥獣対策に従事する“自然共生型社会の担い手”として活動する為、猟友会員の猟に同行し技術を学んだ。猟期の始まる11月中旬ごろから、共猟に体験的に参加させていただき、計6回の共猟を行った。結果として、イノシシ1頭、シカ1頭を仕留める事が出来る様になった。先輩ハンターの教えもあり、徐々に銃器による捕獲の技術が向上しているように感じた。来年度から有害鳥獣捕獲従事者として、さらに活動の幅を広げて被害対策に貢献していく。

3. 地域イベント

対馬で捕獲されたシカやイノシシの副産物である皮を活用し、レザークラフト体験や製品販売などを行った。これにより、ジビエ利活用の幅を広げ、地域資源の有効活用につなげた。

(1) 第2回協働隊フェス

昨年度に引続き実施した体験型活動報告イベント

日時:2月15日(土)10:00～15:00

場所:青年の家

・イノシシレザーを使ったオリジナルキーホルダー作成体験

対馬で駆除、利活用されたイノシシレザーを使いオリジナルキーホルダーを作成する体験メニューを実施。体験参加人数は約30名であり、小学生以下の子供から大人まで幅広く体験し楽しんでた。今回のワークショップは2～5分ほどで完成する内容であったので回転率がよく時間を効率的に使うことが出来た。

・模擬授業(捕獲について)

くくり罠による捕獲、銃器による捕獲、ハンティングドローンを用いた捕獲について、シカ足のはく製を用いた実際のくくり罠の様子、模擬銃を使った狩猟体験、ハンティングドローンを飛ばして音声を出し、実際の狩猟を体感しているような、体験的に学べる模擬授業を実施した。



(協働隊フェスワークショップの様子)



(模擬授業の様子)

(2) レザークラフトワークショップの出店

・クリスマスイベント

日時:12月15日(日)

場所:交流センター2階広場

・ハロウィンイベント

日時:10月27日(日)

場所:はじまりのPORT

・ハンドメイド作品イベント

日時:5月3日(金)

場所:交流センター1階広場



(はじまりのPORTにてワークショップイベント)

Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

(1) レザークラフト教室の運営

レザークラフト教室を行う事で、モノ作りの魅力や楽しさを感じてもらう。また、地域イベントの出店やレザー製品作成や販売、OEM等をする予定。また、島内外でのジビエレザーの普及や使用を促す活動などを行っていこうと考えている。

(2) 有害鳥獣捕獲駆除

銃猟をメインにグループ猟や単独猟などを行い、対馬の有害鳥獣対策に携わる。

また、希少な動植物を保全する必要性が

高いエリアを中心に、ICTを活用した罠による捕獲なども行っていく予定。



(ジビエレザーを活用したレザー製品)

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1) 島おこし協働隊の採用

対馬にとって協働隊の採用は短期的な地域課題の解決だけでなく、長期的な地域の持続性を高める重要な政策だと考える。特に、自然環境保全や人口減少対策、新たな産業の創出などの分野では対馬の未来を支える大きな柱となりうる可能性が高い。求人募集の掲載場所の数を増やしたりするなど、採用を強化し、継続的に取り組むことで、対馬市全体の発展と魅力向上が図れると考える。



(2) シカ、イノシシによる生態系被害対策

今後も農林業や希少種等の生態系に与える被害を軽減するため、効率的な捕獲活動の推進や持続可能な対策手法を模索する事など継続する事が大切だと考える。また、正しい捕獲のルールを守り貢献している方へ、継続して捕獲活動を行えるよう捕獲従事者向けのサポートを充実させてもらいたい。

Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力

3年間の活動を通して対馬の豊かな自然環境と希少種や固有種など対馬には多く生息しており、多様な生態系は大きな魅力であると感じる。その魅力と同時にミッションの課題解決の難しさも感じた。しかし、地域の皆様や市職員などの協力や支えがあり、様々な取り組みを行う事が出来た。今後もこの経験を活かし、対馬の発展に貢献できるよう努める。

2. 対馬への提案

対馬の自然環境は豊かでありながら、シカ・イノシシによる生態系被害や農林被害、磯焼け、海洋資源の減少など多くの課題がある。対馬の美しい自然を守りながら、持続可能な地域として活力を高めるためには、経済と環境の両立を目指した取り組みが大切だと考える。地域住民、行政、専門家などと連携しながら、持続可能な地域づくりを推進していく事が重要だと考える。



令和 6 年度島おこし協働隊 年 間 活 動 報 告 書

所 属 上県行政サービスセンター
ミッション 対州馬保存・活用支援担当
氏 名 中屋 桜

I 令和 6 年度の活動成果

1. 子ども世代に向けた対州馬活用

(1) 親子乗馬会

昨年度に引き続きあそびパークにて、5 歳以上の子どもとその保護者を対象とした親子乗馬会を月に一度実施した。各回 1～3 組の参加があり、少人数制であることを活かし、参加者の興味に応じた内容を掘り下げた活動を展開している。また、令和 5 年度の参加者の中から、後述する対州馬少年倶楽部に 2 組が新たに加入しており、この活動が対州馬に関わる入り口として一定の役割を果たしていると考えられる。

(2) 教員対象乗馬会

教育現場における対州馬の活用を促進するために教員に対州馬を知ってもらうことを目的として教員およびその家族を対象に教員乗馬会を実施した。3 月から計 4 組の教員家庭の参加があり、実際に授業につながったケースもあった。

(3) 対州馬少年倶楽部

昨年度に引き続き、島内の小中学生を対象に子ども乗馬教室(対州馬少年倶楽部)を月に 1～2 回実施した。今年度は新たに小学 2 年生の家庭 3 組が加入した。これまで参加していた子どもたちが年下の子どものに教える場面も見られ、異年齢間の交流や異なる学校の子どもの同士の交流の場としても機能している。

2. 普及啓発活動

(1) 出前授業

こども園から高校までの 9 校において、ふれあい・乗馬体験や対州馬に関する講義や見学の受け入れを実施し、昨年度(5 校)よりも多くの学校とつながりを持つことができた。

また、授業の一環として小学校で制作された普及啓発ポスターを対州馬イベントで展示するなど、授業外でも学校と連携し、対州馬を広く知ってもらう取り組みが行えた。

(2) 動物園での対馬イベント

10 月 5 日～11 月 4 日にかけて富山市ファミリーパークにてツシマヤマネコと対州馬月

間と題してパネルの展示・クイズラリーの実施・グッズ販売、10月5・6日にかけてトークイベントを行った。一か月を通して多くの方がイベントに参加され、対州馬の知名度向上に貢献できたと考えている。



(3) 対州馬イベント

12月1日に目保呂ダム馬事公園にて対州馬少年倶楽部の発表や馬と人リレー、対州馬レース、各種ふれあいなど幅広く馬に親しんでもらうことを目的としたイベント「対州馬ふれあい祭り」を行い、70名ほどの来場があった。また、島内事業者にも出店いただくことができ、対州馬や地域のことを知っていただく機会となった。



(4) 実習受け入れ

島外の対州馬関係人口の増加を目的として2泊3日の実習の受け入れを行った。ホームページ上で募集を行い6件の問い合わせの中から2名の受け入れを行った。各施設の視察や対州馬少年倶楽部の活動の見学を実施した。当初の予想以上に問い合わせがあり需要の高さを感じた。

3. 飼養管理データの蓄積

(1) 体型データの蓄積

体高計を購入し、以下の2点について検証を行った。

①対州馬の時代ごとの体型の推移

②対州馬に適した体重推定式(メジャーのみでおおよその体重を推定する式)

(2) 行動データの蓄積

GPS データロガーを活用し、対州馬の環境適正化に向けたデータの蓄積を行った。馬の頸に装着して一日の運動量を記録し、その傾向を分析する方法を提案した結果、運動量の可視化が可能となり、飼養環境の最適化に向けた基礎データの蓄積を開始することができた。

4. 島外対州馬の調査

繁殖に用いることができる対州馬の発見を目的として、11月2日および12月5日から7日にかけて、島外で飼育されている対州馬の調査を実施した。今回の調査では、4施設で計7頭の対州馬を対象にデータ収集を行った。

調査は、市に残っていたリストをもとに電話による聞き取りに加え、さらにSNSを通じた募集を行った結果、4頭のサンプルおよび飼育状況、体型データを取得することができた。現在、これらのサンプルのデータ解析を進めている。



5. その他

- ・先進地視察(宮城県仙台市)
- ・メディア掲載
朝日新聞 2024/12/27「対州馬の魅力 身近に感じて」
- ・ハーモニセンターキャンプ同行
- ・あいネットつしまベイパークスタンプラリー活動参加
- ・対馬空港対州馬展パネル展示(8～10月)
- ・協働隊フェス参加(対州馬乗馬体験)

Ⅱ 令和7年度の活動予定

1. 乗馬教室の継続

令和6年度を通して行ってきた親子乗馬会、教員乗馬会および対州馬少年倶楽部について来年度も実施をしていく。親子乗馬会および教員乗馬会については宣伝が不十分であり、参加者が減少してきているため、学校を中心に広報を定期的に行い参加者を増やしていく。



2. 対州馬の飼養管理に関する調査の継続・拡大

(1) 体型に関するデータの蓄積

体重推定式の研究について、令和7年度には実用可能な段階まで精度を高めていくことを目指す。特に、体重推定式においては、季節ごとにおこる体型の変化を反映できるかを検証し、より汎用性の高い推定式の開発を進める。

年次変化に関しては、データのさらなる蓄積が必要であるため、対象個体数を増やし、統計的に信頼性のある結果を得るためのデータ収集を引き続き行っていく。

(2) GPSを用いた行動分析

GPSを活用した行動解析を行い、飼育環境や放牧時間が馬の行動量に与える影響を検証する。また、個体ごとの相性や行動特性を分析し、群れ内での関係性や運動パターンの違いを明らかにする。今後は、継続的なデータ収集を行い、より詳細な行動傾向を把握することで、対州馬の飼育環境の最適化や、より適切な放牧・管理方法の提案につなげていく。

Ⅲ 1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬の魅力は、海・山・川が近接する豊かな自然と、ツシマヤマネコや対州馬といった希少な生物の存在にあると考える。また、対州馬が地域文化に根付いている一方で、対州馬飼育施設への公共交通機関が存在しないため、車を持たない観光客や島民は馬に触れる機会が限られていることが課題である。

2. 対馬への提案

子ども世代に向けた対州馬の活用は対州馬の保全において、一定の成果を上げており、人口流出が進む対馬において、対州馬の保全を行っていくためにも今後も継続していく必要がある。一方で、現場の人員だけで現在行っている取り組みを継続することは難しい。そのため、協働隊の枠を継続して確保するなど、教育分野での普及啓発を支える体制を整えることが望ましい。

対州馬に関わる人材を配置することで、対州馬の活用が短期的な取り組みでなく、地域の学びの場として定着していくと考える。

また、対州馬の活用を対馬島内に限らず、島外の馬や対馬に興味がある層に向けてのアプローチを強化し、島外のイベントや教育機関との連携、展示や貸し出しの機会を増やすことで、認知度向上と関係交流人口の拡大につながっていくと考える。

令和 6 年度島おこし協働隊 年 間 活 動 報 告 書

所 属 しまづくり推進部 SDGs 推進課
ミッション SDGs 研究員
氏 名 岡本 遥香

I 令和 6 年度の活動成果

1. 島内の SDGs の調査・把握と発信

(1) SNS「SDGs 未来都市 対馬」Instagram 及び Facebook ページの開設・運用

学校での SDGs 教育が進み、SNS を情報収集ツールとして使う若者世代や、徐々に年配の人も SNS を活用するようになり、SNS 利用者はますます増加している。特に対馬で活躍する人は年配の方でも Instagram を活用している方も多い。対馬市の SDGs を発信する媒体としてはこれまで市のウェブサイトにも SDGs ページがあったが、市の様々な取り組みや人を網羅的に紹介することは難しく、またリアルタイムで次々に情報を更新するには時間がかかる。ここに若者層に人気の Instagram、幅広い世代に使われている Facebook という SNS での発信を加えることで、SDGs に関するリアルタイムの情報を収集したい若者や SDGs についてあまり親しみを持っていない年配の方に、より身近な情報を提供し、関心を持ってもらうことを目指し、令和6年9月に「SDGs 未来都市 対馬」のアカウントを開設した。令和7年2月末時点で20件の投稿を行い、フォロワーは128人になった。ターゲットとしている若者世代のフォロワーが少なく、また島内の取り組み紹介も進んでいないため、次年度は若者にとってより身近で新しい情報の発信に努めたい。

(2) 第2回協働隊フェス

協働隊の市民向け活動紹介・活動報告を狙いとした第2回協働隊フェスを島おこし協働隊で開催し、その場で対馬の SDGs に関する普及啓発を目指して展示などを行った。第1回協働隊フェスには不参加だったため、今回が初めての参加になり、SDGs にあまり関心がない人でも、少しでも関心を持つきっかけになることを狙い、より具体的なテーマ(海洋プラスチック、脱プラスチック、ジェンダー、防災)の読み物の展示や、専門的過ぎず、かつ対馬での暮らしに密接に関わっている SDGs の現状や課題をまとめた掲示物を展示した。

関心を持ち数名の市民の方が話しかけてくださったが、具体的な関心テーマなどは分からず、話を深めることはできなかった。今年度の活動については説明することができ、また



直接会話することはできなかったが、不在時にはじっくり展示を見てくれる方も見かけられた。

来年度は途中退任を予定しているが、退任までの期間、活動報告会といった機会がなくても折々に市民との対話や交流を行っていきたい。

2. 資源循環について

サーキュラーエコノミーモデルとしての「対馬モデル」のうち、島内の資源循環分野について、個人レベルでの実践の第一歩として「リペア・リメイク」について発信を行った。

(1) SDGsカフェ

令和6年6月17日のSDGsカフェのプレゼンターとして、リペア・リメイクをテーマに発表し、参加者と意見交換を行った。発表内ではオランダのリペアカフェ、台湾の修理ステーションなどの市民主体のリペアコミュニティや小宮翔さん、アトリエ M&K さんなどの島内でのリペア・リメイクの取り組みを紹介した。その上で、今後対馬で目指したいリペア・リメイクの習慣づくりに関して、どう工夫すれば市民参加のハードルを下げられるか、技術を持つ人の知識や技術をシェアリングできるのかななどの悩みを提示し、参加者からは日頃から取り組んでいることとして着なくなった服でクッションカバーを作ってみたり靴下の穴は縫ったりしているというアイデアや、またハードルになっていることとして専門的な技術の必要性や修理に必要な部品が廃番になってしまうといった意見が出された。



(2) 対馬 SDGs パートナーズ交流会

11月17日に対馬青年の家で開催された対馬 SDGs パートナーズの交流会で、パートナーズや一般参加の市民を対象に、リメイクの体験として透明シールづくり体験を提供した。大事に長く使いたいと思うお気に入りの物を持つこともまたごみになるものを減らすことにつながる。そこで、リメイクを「今ある物をよりお気に入りの物にする一つの方法」として紹介した。具体的には家庭でも取り組むことができ、子どもから大人まで簡単に楽しめる「自作シール」を参加者に作ってもらった。参加者からは簡単にできることに驚く声や、家庭でも作ってみたいという声があがった。



これがきっかけとなり、体験参加者の方が12月22日の対馬学フォーラムにおいて透明シールづくり体験を提供することで、より多くの市民に伝えることができた。

(3) 対馬学フォーラムでのリペア・リメイクに関する発表

6月17日のSDGsカフェでの発表内容や得られた意見・アイデアを整理し、海外の「LIBRARY OF THINGS」、リペア情報サイト「IFIXIT」といった市民参加のハードルを低くする事例等を参考にしながら、リペア・リメイクに関するポスターを展示・発表した。発表を聞いてくださった方の反応として、リペア・リメイクと同じくサーキュラーエコノミー構築にあたって重要なシェアリングについて、若い世代はメルカリなどを通じて行っているという声や、つくる側が使用者にとって修理がしやすいものをつくらなければならない、そのために社会の仕組みを変えなければという声があった。



3. ESD・人材育成について

令和6年5月22日 豊玉高等学校1年探究学習リレー講座での講話(タイトル「若者の力とSDGsで世界・対馬を変えていこう！」)

令和6年7月24日 対馬グローバル大学 web 講義での講義(タイトル「島暮らし2年目の大学生が考えるサステナブルライフ in つしま」)

令和6年8月7日 対馬市SDGs推進員会議での研修講義(タイトル「SDGs自分事化計画！」)

今年度はSDGsに関する基礎講話の機会を複数回いただいた。年度初めに講話を行った豊玉高校では、自ら関心を持つ以前に、学校でSDGsについての教育を受けている生徒たちにSDGsから物事を考えることで気づける多くのことがあるということや、そうして視野が広がることは楽しいことであると伝わるように工夫して資料づくりを行った。生徒たちの様子からは少し難しく受け取られてしまったように見えたが、これをきっかけに、伝えたい思いが、熱意そのままに伝わるにはどうしたらよいか考えるようになった。

その後、対馬グローバル大学のweb講義や市役所内のSDGs推進員会議などでもSDGsについて、経験を踏まえた考え方や大切にしてほしい視点などについて話をしたが、「伝える」ことの難しさを改めて感じつつ、自信を持って人に想いを伝えられるようになりたいと感じ、協働隊員の釜坂隊員が企画したインタープリテーション講座に参加した。数回の講話経験でなんとなく感じてきていたポイントについて、はっきりと言語化して教えてもらうことができたため、今後機会があればインタープリテーションの手法を生かしたスピーチに挑戦していきたい。

Ⅱ 今後の展開について

1. 退任までの活動予定

(1) 島内のSDGs調査・発信



令和6年度に引き続き、島内の SDGs に関する取り組みの調査と情報発信に取り組む。令和 7 年度は 6 年度に未達成であった現場での取材に力を入れ、月に 2 件程度ずつの取材と、取材内容の発信に取り組みたい。発信手段としては今年度開設した SNS アカウント「SDGs 未来都市 対馬」(Instagram・Facebook)を想定しているが、メディアプラットフォーム「note」に取材内容を文章化しまとめ、動画や写真などの視覚的に興味を持ってもらいやすい部分を SNS で投稿し、見た人の興味関心の拡大や深掘りにつなげたい。

また、退任後も職員や後任の協働隊員に継続して運用していつてもらえるように、魅力ある投稿を短時間で作成できるようなフローを作成・確立させたい。

(2) 対馬における市民の消費行動の調査・分析

小中学校・高校等の教育機関での SDGs 教育が進んでいる対馬ではあるが、実際の暮らしと SDGs をどれだけ結びつけて考えることができるかは未知数だと感じる。そこで SDGs 教育と生活の結びつきを調査し、また児童・生徒たちの保護者へも生徒を通じてアンケート調査を実施し、現状の把握と、子どもたち・保護者自身にも自らの暮らしを振り返ってもらう機会づくりを狙いたい。また、年配者のポイ捨てや不法投棄もなくなる対馬で、物の購入から廃棄まで、市民がどういった考えのもと行動しているのかを明らかにすることで課題にアプローチするきっかけが生まれると考えられる。

(3) 職員の SDGs 意識向上を目指す取り組み

トイレに SDGs に関する壁新聞のようなものを貼ってみてはどうか。昨年度の市への提案として職員の SDGs 教育を提言し、今年度は SDGs 推進委員に対し SDGs に関する基礎講座をさせていただいた。しかし対象が SDGs 推進員に限られ、昨年の提言の中にも挙げた「研修にかかる時間」の課題は依然として解決できていない。しかし SDGs に関して、各個人の興味関心のある分野からでも興味を持ってもらいたいと思っている。定期的に内容に変化のある掲示物を見る人の関心を得やすい。よって誰もが利用し、通路や階段のように素通りされることがないトイレに掲示物を作成し、掲示してみたい。具体的な内容としては、プライベートな生活や職場に関係することなど、とにかく身近な事案をテーマに、豆知識のように少し読めば記憶に残るようなトピックを中心に、関連するデータや一人ひとりに取り組むことができる具体的な例などをまとめ、各回を楽しみにしてもらえるようなものを作りたい。内容に関する調査や作成などにかかる時間から、頻度は月に 2 回程度、A4～A3 サイズ程度の掲示物を想定している。

2. 任期終了後の自身の活動

(1) 大学復学後、学内での活動

卒業論文では対馬で関心の深まった消費行動について調査し、執筆したいと考えている。また、私自身も経験した福岡女子大学の対馬市インターンシッププログラムを履修した後輩と共に、学内で対馬について多くの人に知ってもらい、興味を持ってもらえるようなイベントなどを企画実施した



い。

(2) 大学卒業後の活動

卒業後は対馬に戻り就職し、協働隊で取り組んだ活動に継続して取り組む予定である。

3. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

- ・ SNS「SDGs 未来都市 対馬」アカウントにおける情報発信

私の協働隊退任後、後任の隊員の有り無しにかかわらず、SDGs に関連する職員には SNS での SDGs に関する情報発信を継続していただきたい。文章などが少なくても画像や動画で人を惹きつけることができるのが SNS の良さであり、業務のなかで見つけた新情報や気になったことなど、市民にも親しみを持ってもらうことにもつながるので、頻繁な投稿を目指してほしい。

Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬での暮らしが 3 年目を迎えようとしている今、私が感じる対馬の魅力は、まず一つに世界が直面する課題を実際に目にし、現実の重みと共に知り、机上の空論ではなく現実の中での解決策を模索するチャンスにあふれているところである。そしてその課題解決のために多くの強い思いを持った人や、知識やイノベーションが集結し、それらに出会うことができるということも、他の地域で探そうとしてもそうそうない対馬の魅力であり強みであると感じる。離島、国境、歴史的に大きなポイントがあった場所、豊かな海に囲まれ、陸にも固有の生態系が見られる場所。どんな視点からも学びがあり、各分野を専門とするプロフェッショナルも多くいて、来島する若者や企業団体も多い。

また、移住者と話をしていてよく耳にするのが、目指すのは「自給自足の暮らし」という返答で、そこからは自給自足を目指す人にとって、そのためのあらゆる環境がそろっている場所であるということがうかがえる。対馬の方と話をしていると、「こんな何もない島によく来てくれたね」と言われることがあるが、本当に何もない場所には人は来ないのではないだろうか。移住者にとってそれぞれに魅力に感じる場所があり、つまり対馬は多様な魅力にあふれているのだと感じる。

一方で、そうした「島民には島の魅力があまり感じられていない」ということは対馬の課題の一つだと感じる。島に愛着はあっても、魅力ある島とまでは感じられていない。しかし、島民が島の魅力を実感し理解することができれば、島に誇りを持つことにつながり、その誇りはより対馬への想いも強くさせるのではないだろうか。それができれば、島の課題に目を向けて正面から向き合うことも、島内島外問わず、様々な年齢、様々な背景を持つ人との連携を生み出すこともでき、より対馬を活性化していくことができるのではないかと考える。

2. 対馬への提案「行政職員の SDGs についての学習・情報収集」

昨年に引き続き、行政職員が SDGs についてもっと意識し、日々の生活や業務に取り入れていく



ために SDGs に関連した学習や情報収集をする機会を持つことを提案させていただきたい。

昨年も職員の SDGs についての認識と自身の暮らしの乖離について指摘したが、依然として多くの人にとって SDGs は単語としての認知に留まっているように感じる。SDGs 未来都市について一番よく知っているべき行政職員が SDGs に関心を持てないということは、市民にとってはなおさら関心も親しみも持ちにくいままである。また、学校での SDGs 教育が進化していく中で、子どもたちは学校で SDGs について学び、行動するようになっており、そんな子どもたちや若者が課題に挑戦しようと思った時、大人たちが変わらないことが壁となって立ちはだかっているという現状があるのではないだろうか。

対馬が持続可能な島であるためには、前項「対馬の魅力と課題」でも既述したように、島に誇りを持つ、つまり対馬の島民であることに誇りを持ち、課題を認識し正面から向き合うことが欠かせない。SDGs について知り、対馬の現状に向き合い学ぶことを通じて、同時に対馬の魅力について知ることでもできている。しかし個々人での学習や情報収集が難しいということであれば、まずは各所属課レベルで、その年度を通じて課として取り組んでいく SDGs の目標を定め取り組んでいくといったこともできるのではないかと考えている。その目標を考える過程で、普段の業務や職場での過ごし方の中で、プリントアウトをなるべく減らすことや、照明や空調の効率化による節電など、SDGs に関連することを学ぶことにもつながると思われる。他の課を見て自分が思いつかなかった取り組みをすれば、そこから新たに学べることもあるかもしれない。その情報収集については、先に提案した定期的な更新がある壁新聞など、SDGs に詳しい職員が積極的に発信し、情報収集の場を提供することも重要なポイントになるだろう。取り組む課題をしっかりと明確化し、可視化することでより行動に移すことも当たり前化していく。そしてそれらを市民に発信することで、SDGs と市民の間にあるギャップも徐々に小さくなっていくのではないかと期待する。

令和6年度島おこし協働隊 年間活動報告書

所 属 しまづくり推進部しまの力創生課
ミッション つしま人財コーディネーター
氏 名 川邊 裕太郎

I 令和6年度の活動成果

1. 対馬づくり事業協同組合で雇用する派遣従業員および派遣先事業者の確保

(1) 対馬内外での説明会・イベント参加により、派遣従業員2名を雇用

- ・9月18日、19日に対馬市、長崎県、ハローワークの3者共催のジョブサポートに参加し、求職者に対して、対馬づくり事業協同組合についての説明を実施。
- ・下記日程にてハローワーク主催のミニ面談会に参加し、求職者に対して、対馬づくり事業協同組合についての説明を実施。
10月23日、24日。11月21日、25日。12月18日、19日。1月23日。2月12日、13日
- ・7月27日、長崎暮らし相談会 in 東京に参加し、対馬への移住希望者に対して、対馬づくり事業協同組合について説明を実施。
- ・8月21日と1月22日に(株)コミュニティメディアによる対馬づくり事業協同組合についての「教えて市役所さん」収録後、つしまる通信にて放送。





- ・12月5日、佐保のさと農園にて対馬づくり事業協同組合理事長と派遣従業員とともに日本農業新聞より取材を受ける。その後1月4日の正月特集として対馬づくり事業協同組合が農業新聞の一面を飾る。
- ・12月7日、長崎暮らし相談会 in 福岡に参加し、対馬への移住希望者に対して、対馬づくり事業協同組合について説明を実施。
- ・1月26日、福岡市博多区で対馬ぐらしフェアに参加し、対馬への移住希望者へ対馬づくり事業協同組合について説明。

- (2) 広告媒体を整備し、これまでより積極的に対馬づくり事業協同組合をPRした結果、事業者が新たに3者加入。

- ・整備した広告媒体は下記のとおり。公式インスタグラムアカウントは新規開設し、ほかは既存の媒体に手を加えた。

【ハローワーク求人表、公式インスタグラムアカウント、ホームページ、対馬市のホームページ、チラシ。】

- ・新規加入した事業者の業種は、温泉リラクゼーション業や小売業、真珠養殖業と多岐にわたる。

2.対馬づくり事業協同組合の自立した運営を確立

- (1) 業務見直しにより、1, 216, 000円の経費削減を実現(以下内訳)

- ・出退勤システムの委託見直しにより、委託料300, 000円、通信費180, 000円の削減
- ・コールセンター業務の見直しにより、276, 000円の削減
- ・社労士への委託見直しにより、264, 000円の削減
- ・雇入れ時の社員教育業務委託見直しにより、100, 000円の削減
- ・ホームページの管理・更新委託の見直しにより、60, 000円の削減
- ・電話料金の見直しにより、通信費36, 000円の削減

- (2) 事務的支援により、適正な組織運営を実現

- ・経理・労務・その他一般事務といったいわゆるバックオフィスを支援
- ・派遣調整の補助
- ・広告媒体の充実



3. 研修会および会議への参加

- 4月10日から12日にかけて、滋賀県での「地域おこし協力隊及び集落支援員の初任者を対象とした研修会」へ参加
- 8月5日に、特定地域づくり事業協同組合制度研修会に参加し、総務省担当者および五島市の特定地域づくり事業協同組合の事務局運営を担う(有)イーウィンド担当者より制度説明を受ける。
- 12月9日、佐賀県にて特定地域づくり事業協同組合制度ブロック会議に参加し、対馬づくり事業協同組合について事例発表をおこなった。



Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

(1) 市政への関わり

対馬にUターンする前は佐世保市役所で行政職員として働き、今年1年は島おこし協働隊として行政に携わってきた。これまで培った行政の経験・知識を十分に活用し、また別の形で市政に関わりたいと考えている。

(2) 対馬づくり事業協同組合の支援継続

新たに取り組みたいことが確立したため、やむを得ず島おこし協働隊を1年で退任することになったが、退任後もできる範囲で対馬づくり事業協同組合への支援を継続したいと考えている。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

- 対馬づくり事業協同組合で雇用する派遣従業員および組合員確保のための取り組み
派遣従業員と組合員の確保は、双方とも組合が主体となり取り組むべき事項ではあるが、対馬市には可能な限り支援を継続していただきたいと考える。特に組合員の確保については、多くの事業者と関わりがある市の支援継続により、さらなる組合員確保が望めると考える。



Ⅲ 1年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

(1) 仕事面

- ・未開拓(未参入)の業種や、改善が見込める業種が多くあるように感じるため、ビジネスチャンスがまだまだ眠っていると考える。これがそのまま課題にも直結するが、本土に比べどうしても接客・サービス面で物足りなさを感じるが多々あった。
- ・本土で経験したような仕事上でのギスギスした人間関係を感じることはまずなかった。

(2) 暮らし面

職場や商業施設の駐車場が無料かそれに近い料金で利用できるのは非常にありがたい。また、保育園の送迎や通勤・退勤時に渋滞に遭うことはまずないため、これもとても快適である。

2. 対馬への提案

(1) 島おこし協働隊のより積極的な募集と制度の有効活用

対馬市は地域おこし協力隊制度の開始当初から、積極的にこの制度を活用してきていると聞いている。本年度末から令和7年度にかけて、多くの隊員が退任予定であるため、地域の人口増加や経済活性化のために、ぜひより積極的な島おこし協働隊の募集を希望する。あくまで一例だが、移住相談会における「島おこし協働隊募集の専用ブース」開設といった募集方法をご検討いただきたい。またより柔軟な働き方が可能になる「委託型」の導入もご検討いただきたい。